

「住み開き」というライフスタイル ～「私」をひらく①～

建築局建築審査課 植竹 秀樹

1 住み開きという選択

横浜市18区、様々な地域的特性をもつ多様な区の集合体であるが、各区の地域福祉保健計画の内容を見てみると不思議と8割近くの地区で「身近に集える場」がないという記述が見られる。どうして、そんなにも「場」がないのであろうか？

不動産のストックは日本全体で余っており、勿論横浜でも空家や独居老人などの問題が取り上げられている。場所は余っているのに「場」がないと多くの人が言うので、それならば自分の家を使ったらどうだろう？という発想で、私は「住み開き」を開始した。

「住み開き」という言葉は、大阪で活動するアサダワタル氏（日常編集家）が命名し、最近あちこちで耳にするようになった言葉だが、行為自体は新しい訳ではなく、かつて日本の住居に当たり前にあった縁側や土間空間の使い方とほぼ同じで、家の中や敷地の一部に外部の人間を入れるために門や扉を無理なく開くことから始まる。

しかし、この「私」を少し開くといった行為自体に拒絶反応を示す人もいる。とりわけ高度経済成長期に職住分離をし、家は家族のみのプライベートな領域として生活を送ってきた方々には、なかなか受け入れがたい選択肢のようだ。私自身の親もその一人である。ただ、一方でそのような個に閉じた生活に対して違和感を覚える人も一定数いるから、昨今住み開きという行為が見られるようになってきたとも言えるのではないだろうか。

閉じるか開くかという価値観の話を横に置き、往々にして新たに集いの場を作ろうとし、どこか場所はないかなと探し始めると、無料で何年も貸してくれるほど日本は土地に余裕がないことに気づく。新たに場所を求めるということは大変お金がかかる。まして、そこで集いおしゃべりをすることが目的となると、その行為自体はほぼ収益を生まないの、単純に考えると毎月赤字となる。

経済的な点からも、無理なく、安く、気軽に始めて、嫌だったらやめられる。私自身はそんな軽い気持ちに最適な「場」として自分の住まいを使えばいいという結論に至った。

2 空吹きチャーリー亭という試み

港北区の綱島から大綱橋を越えてからしばらくした所に、平屋庭付きの戸建て物件を借りたことから始まったプロジェクト「空吹き（そらふき）チャーリー亭」（通称：空（そら）ちゃ）は、2010年11月より住み開きの実験台となった。

空吹きという名前をつけた理由は2つで、まずその平屋の立地が鶴見川沿いで、そこには大きな青空いつも風が吹いているからということと、もう一つはここは空っぽの空間で、いろんな人の風を呼んできたいという思いがあったからだ。またチャーリーというのは、筆

者の個人的なあだ名であり、音の響きから採用した。

空ちゃには5畳ほどの空きスペースと5畳ほどの空き庭があり、このスペースを使いたいという人がいれば無料でお貸ししている。現時点で家を開く頻度は、平日は仕事があるために主に週末で、大体月2回ぐらいである。固定客がもっとつけば定期的に開いてもいいのだが、何より無理をしないのが長続きの秘訣だと思って取り組んでいる。

家を開くという行為は、やり始める前は何だかとても大きな不安にかられるのだが、開いてみると実にゆるくいいかげんな試みで、自分の生活が住み開きによって圧迫されるといったことは現時点でほほえない。また、拠点運営という観点から言っても初期費用が0円。新たな家賃等の固定費も0円となり、食器などの備品等も自然と寄付で集まってくるという、むしろちょっと得をする生活なのだ。

3 空ちゃの空き部屋・空き庭活用

空ちゃでの活動は、最初はやはり友人や近所の知り合いを招いてご飯を一緒に食べようということで、ご飯会を開催している。その後、どんな企画をやるときにでもご飯会は欠かさず行っている。鍋会、カレー会、パスタ会、韓国会などである。

集う場所を求めている人たちに、小さな場を提供することも目的の一つなので、会議やワークショップの場所として提供したり（写真1）、朗読会、整体や気功教室の場となったり。あるときは女子会やサークルの忘年会の会場になったりした。機能面で言うと部屋貸しに近いが、あくまで家なので、お菓子を食べようが、眠ろうが、夜遅くになろうが、亭主（＝私）が良ければそれでいいというゆるさが、住み開きのいい所である。

写真1 空ちゃ活動（ワークショップ）



空ちゃの空き庭では野菜やお花を植えようという活動が立ち上がり、定期的な土いじりの会も開催している。友人の一人に街中に花を増やしたいという思いを持ち、花を植えられる場所を探していた方をつかまえて空ちゃ

で活動してもらおうことにした。

また活動していて、地域活動・市民活動・サークル活動をしている人たちの中でお金と時間を気にしなくてもよい会議などの集いの場所というニーズが思いのほか多いことがわかった。いわゆる部室的な空間である。この空間を行政施設でやろうと思えば退室時にはものはすべて持ち帰れと言われ、民間で借りようと思えばお金がいくらあっても足りないが、住み開きはとても安価で自分たちの部室たりえる場所を作ることができるのである。

2011年12月には、大倉山の近くの大曽根商店街沿いに引っ越しをし、引き続き空きスペースを開放しながら商店街とどのように絡んでいくか目下検討中である。

4 住み開き空間の心得

そんな住み開きを実践していく中で、空間を提供する亭主として、空間の心得というものを考えるようになった。いわゆる、おもてなしの精神である。

住み開きという言葉が使われる以前に、延藤安弘氏によって提唱された「まちの縁側」という概念がある。延藤氏は、その著書『人と縁をはぐくむまち育て』の中で、「まちの縁側」が目指したい役割として次の10があると述べている。

「出合いの場所・混ざり合う場所・もてなしの場所・思いやりの場所・対話の場所・洞察の場所・丹精の場所・Do Niche（くつろぎ）の場所・領有の場所（空間を我がものにする）・〈イノチ〉はずむ場所」の10である。

延藤氏の「まちの縁側」は、特に住まいというのに限定している訳ではないが、その空間のあり方に対する考え方は大変参考になる。

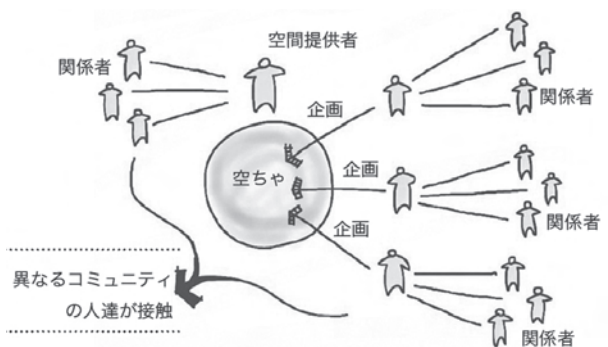
私自身、空ちゃという場を運営していく中で、また来てくれますようにと願いを込めて、上の10の役割を実践していきたいと考えている。

5 多世代が交流する場の仕掛け

また空ちゃは、いろんな世代の人でも来てほしいと考えているが、どうすればいろんな人達が来てくれるかと、自分なりに真剣に考えて、運営のツボを開発している。二つほど紹介したい。

一つ目は、なるべく「空間提供者と企画者を分離する」ようにしている（図1）。これは、空間提供者（亭主）自身が企画をすると、どうしても空間提供者と所属コミュニティの人のみがあることになるのに対し、空間提供者とは別の人が企画者になることで、それぞれに属す

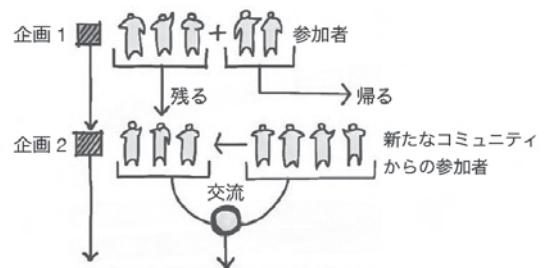
図1 空間提供者と企画者が分離する場合



るコミュニティの人達が互いに出会うようになり、また企画者が空間を領有する感覚も芽生えるだろうという意図からである。

二つ目は「1日の中に複数の企画を盛り込む」ということである（図2）。往々にして人には興味関心がある。しかし、その関心には偏りがある。お祭りごとが好きなの人もいれば、真面目な議論が好きなの人もいる。世代ごとにも興味は違ってくる。それぞれ違うタイプの企画を1日の中に盛り込むと異なるコミュニティの人が互いに出会うことが起こる。これを積極的に仕掛けることで、出会い混ざり合う場所を作ろうとしている。

図2 企画は異なっても人は横断する



▶ 結果、異なるコミュニティの人達が相互交流をする

6 住み開きから生まれるもの

住み開きとは、個人の生き様のような行為で、その中心は開く人＝亭主にある。客人は亭主のことを気に入ればまた次回も来るだろうし、気に入らなければ二度と来ることはないだろう。嫌いな人の自宅に遊びに行くことがないのと同じである。

そこでは、きわめて個人的なきっかけ・興味で、個人的なつながりが形成されていく。その過程で地域の中で自分ひとりでは生活がままならず本当に助けが必要な層とのつながりを形成するかもしれないが、そのつながりが継続するという確証もない。

ただ、確実に言えるのは亭主にとって住み開きを行う前よりも、後の方がつながりの質・量共に強固になり、自分自身は前よりも社会的になり、その街に住み続けたい、街のために何かをしたいと考えるようになったということである。住み開きをする家が沢山ある街は、ない街よりも多くのつながりと愛着を有しているだろう。

私が思うに、住み開きとはライフスタイルの刷新運動なのである。過去、国が近代化の中で推進しようとした個を重視するライフスタイルへのアンチテーゼとして市民の中で自主的に起こっているうねりであり、その成果物である人のつながりや街への愛着などは第一に亭主自身に還元される。人や地域とのつながりが希薄であるとあなた自身が感じるのであれば、まずは家を開いて人を呼んでみてはどうか？という具合である。

行政の政策的にみて、この住み開きという行為をどのように扱うのかは、政策が「新しい公共」概念の中でどれだけの広がりを持つことができるかに拠っているようにも思う。

いずれにしても、横浜の中で住み開きのような活動が多くなれば、それだけ街中にゆるやかなつながりが形成され、住む街に愛着をもった人材が増えていると言えるのではないだろうか。